

ミャンマー

ビルマ人の名前と対人関係

高橋 昭雄

【私のビルマ名】

私がアジア経済研究所の海外派遣員としてビルマ（ミャンマー）のラングーン（ヤンゴン）にあるラングーン外国語学院ビルマ語学科に留学していたことである。入学の挨拶に行った私に学科長がまずしてくれたことは、私にビルマ名を付けることであった。先生は同科の若い教師に百年カレンダーなるもので私の誕生日が何曜日にあたるか調べさせ、一〇分ほど考え込んだ後、「アウン・コー・スエー（Aung Ko Swee）」という名を考案してくれた。

アウン・コーは私の名前である「昭雄」からの連想、スエーはドー・ヌ・ヌ・スエーという学科長の名前から一字採ったものである。アウンは「成功」、コーは「兄」、スエーは「親しい人」をそれぞれ意味する。当初はピンと来なかったが、ビルマの友人たちがきれいでとても珍しい名前だと褒めてくれるので、今では自分のビルマ名を非常に気に入っている。だが、この名前はビルマ族の命名方法の原則から逸脱している。私は月曜日生まれなのにアウンから名前が始まっているからである。

それではビルマの人々はそのような基準で名前を決めるのであろうか。ビルマは多民族国家であるので命名法は民族によって異なるが、ここでは人口の七割を占めるビルマ族(ビルマ語での呼び方に倣って以下「ビルマ人」とする)の命名方法を見ていくことにしよう。

【ビルマ式命名法】

われわれ日本人にとって誕生日といえは何年何月何日ということになるが、ビルマ人にとってそれより重要なのは曜日と時刻である。彼らの名前は基本的には生まれた曜日によって決定され、水曜日生まれのみはこれに時刻が加味される。

ビルマ語のアルファベットの一段目には、Ka' Hka' Ga' Gha' Nga の五文字が含まれるが、月曜日生まれにはこの中の一文字を基にした音節で始まる名前が付けられる。以下同様に、二段目の Sa' Hsa' Za' Zha' Nya は火曜日生まれ、第三段目の Ta' Hta' Da' Hda' Na は土曜日生まれ、第四段目の Pa' Hpa' Ba' Bha' Ma は木曜日生まれ、第五段目のうち La と Wa は水曜日の午前中生まれ、第五段中の Ya と Ya (文字は異なる) は水曜の午後(これをヤフという)生まれの者にそれぞれ用いる。残る文字のうち、Tha と Ha は金曜日生まれに、そして母音 A (およびその変形) は日曜日生まれに付ける。

たとえば、月曜生まれなら Kaung (ကျွန်), Khin (愛する)、火曜生まれなら Sein (ダイヤモン
ド)、Nyan (英知)、土曜生まれなら Tin (積む)、Htun (輝く)といった語から始まり、それぞれ意味を持つ一音節の語が単独で、あるいは二〜四語組合わさってビルマ人の名前ができる。したがって、

Aungに始まる私の名前は本来ならば日曜日生まれ用の名前なのである。

以上が、ビルマ式命名法の原則である。だが、絶対に曜日ごとに指定された音節で始めなければならぬというわけではなく、私のような例外もよく見かける。ただし、名前の中の少なくとも一音節には曜日を表す語を用いるのが一般的である。私の場合は、Aungの後の Ko が月曜日生まれを示している。

【姓を持たないビルマ人】

名前による男女の区別は、男性用あるいは女性用の名前からある程度見分けることができるが、男女兼用の名前も多いので完全に区別することは不可能である。

そこで敬称が男女を区別するのに役立つ。男の場合、社会的地位あるいは年齢が上の者にはウー、同程度ならコー、下ならばマウンをそれぞれ名前の前に付ける。女なら、年齢や地位の高い者にはドー、同程度か低い者にはマを付けて呼ぶ。すなわち、元首相ウー・ヌ(U Nu)の名前はヌであり、ウーは名前ではなく敬称である。元国連事務総長のウー・タン(U Thant)も同様である。

敬称を含めても名前から判断できることは性別までであり、名前から夫婦関係や親族関係の有無を調べることは全く不可能である。これまで述べてきたことから分かるように、ビルマ人は姓あるいはそれに類するものを一切持たないからである。双系制で、先祖代々、子々孫々といった系譜制を持たないビルマ人社会は姓というものを必要としなかったものと思われる。

以上述べたように、生まれた曜日に制約されつつ、概して好ましい意味を持つ(少なくとも悪い意味

ではない。数個の語で構成され、おまけに姓がないのがビルマ人の名前である。若い世代においては、昔風のヌとかバとかバとかいう単音節の名前は減っており、三、四音節の長めの名前が増えてはいるが、意味上の制約から使用できる語が限られているため、当然同名の者が非常に多くなる。ティン・ウィンとかアウン・タンとかいう名前を持つ者はそれこそ無数にいますと云ってよい。

そこで、同名を区別する便法のひとつとして、名前の前に修飾語を付けるという方法がある。大学関係者ならテックアドー（大学）、博士ならドクター、将校ならボーといった具合である。また作家などには自分の出身地を付ける者もいる。

【呼称と対人関係】

しかし、一般庶民にはそんなこともできないので、別名を用いるという方法がしばしば採られる。私が農村で調査をしたときのことであるが、土地台帳にあたる小作人登録帳に記載されている名前と実在の人物を対応させるのに非常に苦労した。かなりの人々が登録した本名とは別の名前を、ふだんは使っていたからである。また、親族関係の調査も重要な調査項目であったが、姓がないためになりに手間暇をかけなければならなかった。

そしてさらに私を困惑させたのは、ある人物が自分で名乗っている名前と他人が彼（彼女）を呼ぶ名前が違うこと、しかも人によって同一人物に対する呼び方が異なる場合があるということだった。つまり、個人相互間の関係のあり方によって呼び方が全く違ってしまふのである。

だがよく考えてみると、対人関係の文脈によっていくつかの名前を使い分けるといふ方法で、どう

しても同名が多くなってしまうビルマ式命名法の弱点を補っていることが分かる。自己(エゴ)を中心とした特定の社会圏の中で、名前と人物がほぼ一対一に対応するようにして、自分の位置を明確にしようとしているのではないかと思われるのである。

自己の置かれた社会的状況によって変わる敬称あるいは別称使用法は、ダイアデックであると言われるビルマ人の対人関係の作り方そのものを案外的確に映し出しているのかもしれない。

【参考文献】

土橋泰子「ビルマ人と名前」

『ビルマ情報』第二五〇号 一九七八年六月

(たかはし あきお／アジア経済研究所在ヤンゴン海外調査員)